ヨーロッパの言語事情

インテル・ミラン MF のスナイデルが途中出場した長友の肩を抱きながらしきりに戦術を伝えている。わかった、わかったとうなずく長友。緊迫したサッカープレミアリーグ試合中の一コマである。インテルは、2010 年のチャンピオンズリーグの覇者、セリエ A の名門クラグ。スナイデルは先のワールドカップで 5 得点をあげオランダを準決勝に導いたスーパースター。長友は日本が優勝したアジアカップでの活躍が世界中の注目を集め、1 月末にインテルへの電撃移籍を果たしたばかりである。

サッカーファンの私は、この場面を見ながらふと思った。二人は何語で話しているのだろうかと。それぞれの母国語はオランダ語と日本語。インテルはイタリアのチーム。ちなみに長友は移籍会見で見事なイタリア語を披露して喝采を受けている。オランダでは英語が第二言語のように使われているからスナイデルは英語もできるはず。瞬時に脳裏を様々な可能性が横切り、二人のやり取りは恐らく英語かイタリア語、という一応の結論に達して、私は試合観戦に戻った。

このところ、ヨーロッパの大学の国際化事情やヨーロッパの言語事情について小論をまとめる機会が続いた。ヨーロッパでは高等教育の国際化の取り組みが盛んで、欧州域内で流動性を高め人的交流を活性化するための政策が、エラスムス計画やボローニャ計画といった形で、1980 年代後半以来、積極的に推進されている。欧州域内のどの国で高等教育を受けても一律の基準で認定できるよう、教育内容の質保証や認証評価への取り組みが行われている。その結果、これまでに延べ約 190 万人が欧州域内の教育機関間で行き来している。一方、日本で英語教育に携わる私たちにとってより興味深いのは、欧州評議会が 2001 年に発表した『外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』、いわゆる CEFR（Common European Framework of References for Languages: Learning, Teaching, Assessment）である。これは、ある言語を使って「何が」「どの程度うまく」できるかを示した Can-do statement に即して、学習者の言語力を測る共通の基準枠を定めようとするもので、世界中の言語教育に大きな影響を与えている。この共通参照枠の背景としては、加盟国がそれぞれに異なる言語をもつ域内で、教育の機会を求め、あるいは仕事の機会を求め、学生や労働者が自在に移動する社会環境がある。そこでは、個人がそれぞれの環境下で必要な言語を必要な程度使うことができるかどうかが問題となるのであり、これがいわゆる複言語主義の観点である。

ヨーロッパのサッカー事情は、まさにヨーロッパの人の移動と言語事情の縮図である。世界中からトップクラスのサッカー技術を備えた選手が集まり、より強いチームへと縦横無尽に移動する。選手はそのチームで使われている言語が何であれそれを習得し、サッカーという“仕事”を遂行しなければならない。自分が仕事をするために不可欠というニーズが、結果として見事な言語習得を促進していく。

ヨーロッパの言語事情と日本のそれとは大きく隔たるので、ヨーロッパにそのまま倣う

ことはできないが、言語学習における“個”の視点には大きな示唆があるのではなかろうか。学習者個人のニーズに資する英語教育であれば望ましい。日本の英語教育には、学習者の発達段階の分析、学習者のニーズ分析などがもっと反映されるべきかもしれない。ピッチを駆け巡る世界中の選手の動きを追いながら、そんなことを考えた。